

コラム 2005年 後期

1 陰陽の世界から（その1）

2 陰陽の世界から（その2）

3 陰陽の世界から（その3）

4 陰陽の世界から（その4）

5 陰陽の世界から（その5）

陰陽の世界から（その1）

雨はなぜ降るのか

東洋思想の陰・陽については、映画陰陽師（おんみょうじ）の公開で少し皆さんに知られたと思います。その中で使われていた「陰陽五行」という言葉は、私たち経絡治療を行うものにとって大切な基本原理となっています。今回は、まず「陰陽」についてお話してみたいと思います。

東洋思想の中にある「陰陽」とは、絶対的なものでなく、相対的な捉え方をするものです。陰とは、静的なイメージ、陽とは、動的なイメージを現します。例えば、夜と昼、女と男等です。夜の中にも朝に近い夜もあれば、真夜中もあります。女性の中にも、男っぽい女性もいれば、女性の中の女性もいます。これらを陰中の陽とか、陰中の陰とか呼びます。

また、肺は陰の臓器ですが、陰の臓器の中では陽に属します。男女は絶対的ではないかと思われている方もおられるでしょうが、昨今の情勢を見るとき、相対的であることがお分かりいただけるでしょう。このように相対する概念を「陰・陽」に分けて考えるのが東洋思想といえます。

前置きが長くなってしまいましたが、では、雨は何故ふるのでしょうか。

「そんなこと決まっているじゃないか」と言われるでしょう。子供の頃から学校で勉強してわかっていることですね。つまり、雨の作りだされる原理は知っ

ているのです。

しかし、どうして高気圧・低気圧が出来るのでしょうか。「決まっているじゃないか。気圧の高いところが高気圧で、低いところが低気圧さ」

確かにそうです。でも、見る方向を変えてみませんか。

もしこの地上が平らで山が無かったらどうでしょう。そこには一面陽が当たり、陰陽の区別がなくなります。現実には、地球は丸いですから必ず影は出来るのですが、もう少し小さい範囲で考えています。

つまり、高い山脈がつらなり、そこに陽のあたる陽と、陽のあたらない陰とが出来ます。そのため、高気圧・低気圧が出来ると考えられます。そのため雨が降ったりするのです。

これは陰陽の世界から見た考え方と言えます。

東洋医学（漢方）も東洋思想の一部ですから、このように西洋的な見方とは異なる方向から物事を見ています。わかりにくいかも知れませんが、これから少しずつお話していきたいと思っています。少しでも鍼灸（経絡治療）の考え方を知っていただければと思います。

陰陽の世界から（その2）

陰陽の相対性

前回の話で、「陰陽は絶対的ではなく、相対的ですよ」と言いました。少し相対的であることの実例を挙げましたが、今回は、更に具体的にお話してみたいと思います。

まずは、人の体を陰陽で考えて見ましょう。

人体では上が陽、下が陰となります。これは太陽の陽が当たるところを陽、日陰になる部分を陰とします。と言うと、もっとはっきり分かるのが、背中が陽、お腹が陰となります。これは四つんばいになった姿を思い浮かべていただければ、お分かりになると思います。

更に人体の体表が陽で内部が陰になります。

これらを総合的に考えますと、胸は陰であり、また、上下からは陽になります。このように同じ部位が見方の違いによって陰にもなり、陽にもなるのです。この陰陽の概念を内臓、つまり五臓六腑に置き換えてみましょう。五臓が陰、六腑が陽になります。陰臓たる肺臓は陰臓の中では、陽の臓器になります。このように、体はすべて陰陽に分けられます。そしてこの陰陽の歪み・不調和から病へと変わっていきます。

人によって右側だけが痛くなったり、違和感を覚えたりしますが、これは陰陽の不調和によってその支配領域に反応が出るためです。この反対もあります。「右利きなのにどうして左が痛くなるんでしょう」と良く聞かれますが、これが答えとなりますね。
今回はこの陰陽概念が臨床にどうつながっていくのか、お話してみたいと思います。

陰陽の世界から (その3)

陰陽と治療概念

前回まで陰陽の相対性についてお話してきましたが、その相対的な概念がどう治療（臨床）に結びついているのでしょうか。

少し判りやすくお話してみることにします。

前回の話の中で、内臓の陰陽についてふれました。この内臓の陰のもの、すなわち「肝・心・脾・肺・腎」について考えてみます。漢方においては陰の臓が主体となります。

それでは個別に考えて行きましょう。

まず、体の上方に位置している「肺と心」からお話しましょう。この二つの臓器は、体の上部に位置し、臓器の中では「陽」に属します。

更に、この二つの臓器を見ますと、「肺は陽中の陰」「心は陽中の陽」となります。その働きを考えてみてもお判りいただけると思います。「心臓」のほうがより活発に動いていますよね。つまり、肺に比べより動的ですね。

次に下部に位置している「肝・腎」についてみてみましょう。「腎臓」は泌尿器系をイメージされ（漢方ではそれだけではありませんが）、水に関係する臓器です。つまり、より陰的な働きとイメージになります。このことから、「腎」は「陰中の陰」となり、「肝臓」は「陰中の陽」となります。

最後に残った「脾」は中央を意味します。（但し、「脾」は現代医学で言うところの「脾臓」とは全く違い、消化器系を支配する大きな力と考えてください）

今まで各臓器を陰陽で見てきましたが、これをもう少し別の方向から見てみましょう。

生物はすべて太陽とのかかわりで一日のリズム、一年のリズムを刻んでいます。まず、一日のリズムから見てみることにしましょう。「朝」は「夜」から太陽が昇ってきて「朝」を迎えます。つまり、「夜」は陰ですから「陰から陽」へ変わる時間帯と言えます。そうしますと、「陰中の陽」つまり「肝」になります。

次に、「昼」は「陽中の陽」になりますので、「心」、「夕方」は「陽からだんだん日の沈む陰に」移行しますので「陽中の陰」たる「肺」になります。

残った「腎」は「陰中の陰」ですから「夜」となりますね。

もうひとつ残っていますね。そうです「脾」です。これは少し理論的に難しいものですので、ここでは「昼の暑い時間帯」をイメージしてください。太陽が真南に位置する「南中」にあたります。

これで、朝から夜に渡って「肝・心・脾・肺・腎」の順番になります。そしてこの順序が治療における大事な原則につながって行きます。

長くなってしまいましたので、この先の話は次回とさせていただきます。

陰陽の世界から（その4）

陰陽と治療概念（2）

前回は一日における五臓の順序についてお話しましたが、今回は四季における五臓の配当について述べ、治療法則にまでお話できればと思います。

まずは四季の五臓の配当から始めましょう。

「春」は寒く暗い冬の陰の季節から陽気が出てくる時期になります。つまり「陰中の陽たる肝臓」で、まさに木々が春枝を伸ばし葉を茂らす働きが肝臓の働きに例えられます。

「夏」は明るく暑い季節で活動的なイメージとなります。つまり「陽中の陽たる心臓」の季節です。

「秋」は暑い季節から冬へ向かう準備の季節で、木々が葉を落とし寒い冬に備える姿と考えるとお判りいただけるでしょう。つまり「陽中の陰たる肺」がそれに当たります。

「冬」は最も寒い時期にあたり、「陰中の陰たる腎」つまり、陽中の陽たる「心」との対比でもお判りいただけるでしょう。

最後に「脾」が残っています。この「脾」は少し特殊で、各季節にある土用に関係が強く、つまり各臓器とそれぞれ強い関係を持っています。その中で「盛夏」に配当されています。何故と思われませんが、私の能力不足のためここではご容赦ください。

このように春から順に「肝・心・脾・肺・腎」の順に並びます。よく見ますと一日の順序に同じですね。

大分前置きが長くなってしまいましたが、ここらで治療概念の話に移りましょう。

前回と今回と長く五臓の順序についてお話してきましたが、それはこの順序が大変大事になるためです。まず、時計をイメージしてください。時計の数字をイメージし、「12時は肝、2時は心、5時は脾、8時は肺、10時は腎」の五角形をイメージしてください。例えば、肝と心、心と脾、脾と肺、肺と腎は母子の関係で前の臓器が親に当たります。更に各対角にあたる肝と脾、心と肺、脾と腎、肺と肝、腎と心は拮抗関係に当たり、前の臓器が後ろの臓器を押さえ込む関係に当たります。(但し、拮抗だけでなく調和の関係でもありますが、ここでは説明の関係上拮抗関係で説明します)

この母子関係、拮抗関係から治療法則が成り立っています。また、長くなってしまいましたので、ここでヒントの例えをお話して今月のお話を閉じたいと思います。

“母子関係”から。子供が元気なく、病気になったりすると、親・特に母親は大変になり次第に元気をなくしていきます。この関係が五臓の母子関係にもそのまま当てはめられます。

この続きは次回といたします。

陰陽の世界から (その5)

陰陽と治療概念(3)

前回母子関係・拮抗関係から治療概念が成り立っているところまでお話ししました。今月は、これをどのようにして決定し、治療に結びつけているかお話ししたいと思います。

経絡治療は脈診流と言われるほど脈診を大切にしています。それは診察に当たって診断・体の変化を的確に把握するためのもっとも重要な情報をそこから得られるためにほかなりません。この脈診を軸に四診法を駆使し治療法が決定されていきます。脈診は両手関節(橈骨動脈)に片側3本・両手で計6本の指を当て、それぞれを比較していきます。そして望・聞・問診で得られた情報とあわせて「証」として決定されます。つまり「証」とは、診断であり治療点を示唆するものとなります。このことから「随証療法」といわれます。

五臓六腑、特に五臓を中心に母子関係・拮抗関係を捉えて診察・診断していくのが経絡治療の特徴といえるでしょう。ここからお分かりいただけるかも知れませんが、五臓・六腑を整えていくことで生命力の強化・免疫力の向上につながります。そして整えられた体は、自らの力で病を癒していくのです。皆さんも生命力・免疫力に期待して見ませんか。

次回は「鍼と針について」お話してみたいと思います。